

日々歩

hibiho
ひびほ



がんをこえて、ともに歩む

季刊 No.26 / 2020 Winter

がんを学ぼう [教えて!ドクター]

がん治療のために重要な
「せん妄^{もう}予防」と「心のケア」
(東病院 精神腫瘍科)



がんプロフェッショナルたち
理学療法士

あなたを支えるチーム医療の輪
ウォック
WOC外来で「ストーマケア」と
「排便機能障害の改善」を

「がんと生きる」を支えます!
がんや治療に伴うむくみの
「リンパ浮腫ケア外来」

MICAO

「がん症状別レシピ検索サイト“CHEER!”

チアー



東病院は、がん治療に伴う症状別レシピ検索サイト“CHEER!”を開設しました。Cancer(がん)、Help(助ける)、Eat(食べる)、Easy(簡単)、Recipe(レシピ)をコンセプトに、東病院栄養管理室が患者さん・ご家族を対象に毎月開催している「柏の葉料理教室」から、人気のあった100レシピを厳選して紹介しています。がん治療に伴う食事のお悩みに合わせ、「症状別」「材料別」「料理区分別」「フリーワード」で検索が可能です。レシピの他にも、がんと食事に関する情報やQ&Aも掲載。がん患者さんと周囲で支える方の毎日の食事が少しでも楽しくなるよう、今後も情報を追加していきます。ぜひ活用ください。

<https://www.ncc.go.jp/jp/ncce/CHEER/index.html>



「がんゲノム医療」テーマの市民公開講座を開催

2019年11月30日、東病院で市民公開講座「ゲノム医療が導くがん治療の未来—国立がん研究センター東病院の取り組み—」を開催しました。保険適用で関心が高まる「がんゲノム医療」への理解を深めていただくため、医師や遺伝カウンセラーなどの専門家が、がんゲノム医療の基礎知識から診断・治療までをわかりやすくご紹介しました。約150名が参加し、盛会のうちに終了しました。当日の資料は東病院ホームページに掲載しています。

東病院では今後も年2回、最新のがんに関する講座を開催します。最新情報は下記ホームページでご確認ください。

<https://www.ncc.go.jp/jp/ncce/info/seminar/index.html>



中央病院 副院長と乳腺外科長よりごあいさつ

2019年6月に中央病院研究担当副院長を拝命し、先端医療科長、臨床研究支援部門長なども担当しています。就任から半年を経て、臨床研究中核病院、がんゲノム医療中核病院としての当院の活動の維持はもちろん、その土台となる現場レベルの底上げも重要なミッションであると感じています。若手医師はじめ研究者たちが活発に研究に取り組める環境作りを目指すとともに、これまで当院が取り組んでこなかった研究開発領域にも挑戦していきたいと考えています。



中央病院 副院長(研究担当)
山本 昇(やまもと・のぼる)

大学病院等で乳がんの診断、治療、緩和医療と乳がん関連診療に広く携わり、2019年4月より中央病院乳腺外科長を務めています。当院の乳腺外科は日本屈指の手術症例を有する専門部門であり、最新治療を患者さんに提供し続けることを目標に日々診療を行っています。他科との強固な連携で乳がん診療のチーム医療を実践している点も当院の特徴です。今後も患者さんの満足度の高い診療体制作りを推進し、日本の乳がん診療の発展に力を尽くしていきたいと思えます。



中央病院 乳腺外科長
首藤 昭彦(すとう・あきひこ)

《目次》

- News & Topics 2
- がんプロフェSSIONALたち 3
中央病院 骨軟部腫瘍・リハビリテーション科
理学療法士

- がんを学ぼう【教えて!ドクター】 4
がん治療のために重要な「せん妄予防」と「心のケア」
東病院 精神腫瘍科
- あなたを支えるチーム医療の輪 6
vol.7 WOC外来で
「ストーマケア」と「排便機能障害の改善」を

- 「がんと生きる」を支えます! 7
vol.8 がんや治療に伴うむくみの「リンパ浮腫ケア外来」
- NCC INFORMATION 8
東病院・レディースセンターから
がん治療後の「くすりによる妊娠・出産への影響」について

がんサバイバー経験を生かし、リハビリで 身体機能の回復・維持を支援

がんの治療前、治療後、療養中には、身体機能の維持や向上のためにリハビリを行うことが重要です。中央病院骨軟部腫瘍・リハビリテーション科では、現在、4人の理学療法士がリハビリ指導を行っています。その1人である沖田祐介さんに、理学療法士の仕事内容、目指した理由などをインタビューしました。

—理学療法士の役割を教えてください。

理学療法士は、病気やけが、手術や加齢によって身体機能が低下した人に対し、運動、温熱など物理的な方法を用いて、身体機能の回復と、機能低下を予防する役割を担う国家資格です。

がん患者さんの多くは、手術や化学療法、放射線療法などの治療や入院によって、体力や身体機能が低下してしまいます。私たち理学療法士は、医師の指示の下、リハビリ指導を行い、患者さんたちが日常生活に必要な動きや機能を取り戻すためのサポートをしています。

消化器がんや頭頸部がんなどの手術を受ける予定で、合併症のリスクが高いと考えられる患者さんに対しては、リスクを減らすための呼吸訓練、筋力・持久力トレーニングの方法を手術前に説明し、術後も患者さんが自分でリハビリが継続できるようにサポートしています。また、脳腫瘍や食道がん、骨軟部腫瘍の患者さんは手術前にお会いして身体機能を把握し、術後は状態の変化を確認しつつ退院に向けたトレーニングを実施します。

—リハビリはどのように行うのですか。

専用のリハビリテーション室だけでは

なく、患者さんの状態によっては、病室でも実施します。患者さんを1対1で指導しながら、日々の身体の変化をチェックしています。早い人は手術の翌日からリハビリをスタートするので、集中治療室でリハビリを行うこともあります。

—理学療法士を目指したきっかけは？

中学3年生のとき、骨軟部腫瘍の一種である骨肉腫になって人工関節を入れる手術を受けました。手術後、脚が少し不自由になったのをきっかけに理学療法士という職種に興味を持ちました。私が理学療法士を目指した15～16年前には、がんの患者さんに対するリハビリの有効性がまだ今ほど着目されていなかったのですが、病気やけがなどで身体機能が低下した患者さんの役に立てればと思いました。

私は8年前に右脚の一部を切断し、義足をつけています。中央病院に入職する前は、骨軟部腫瘍の手術後の患者さんや義足を使っている人の歩き方の解析をし、脚の障害をカバーしてスムーズに歩く方法の研究をしていました。

中央病院は、希少がんである骨軟部腫瘍の患者さんも多い病院なので、自分の病気や研究の経験を生かして、患者さんのサポートができたかと考えています。

—やりがいを感じるのはどんなときですか。

患者さんとコミュニケーションを取って、リハビリのゴールを決め、それがうまくいったときです。

同じがん種で同じように機能が低下していたとしても、どのような対応やリハビ



「担当医に運動を控えるように言われている患者さん以外は、機能の維持・回復のためにも、積極的に体を動かしてください」

リをするかは患者さんによって異なります。小児から高齢者まで、さまざまながん種の患者さんのサポートができることにやりがいを感じています。

—今後、実現したいことはありますか？

理学療法士として、個々の患者さんに合ったサポートができるように、日々勉強し続けたいです。患者さんのサポートと並行して、例えば、骨軟部腫瘍などの治療で、治療前と同じように歩けなくなってしまった患者さんが、どのようなリハビリをしたら、どのくらいの期間でどの程度歩行が可能になるのか、見通しを具体的に示せるような研究もしていけたらと考えています。

おきた・ゆうすけ / 理学療法士。神奈川県出身。15歳のときに骨肉腫を経験したがんサバイバーの1人。理学療法士免許・博士学位取得後、大学や研究所、海外施設での研究活動を経て、2019年4月より中央病院勤務。

がん治療のために重要な「せん妄^{もう}予防」と「心のケア」

がんと診断されたとき、治療の副作用や体調の変化が出たとき、転移・再発を告げられたとき——そうした出来事があったときは、多くの患者さんやご家族が、「不眠」「不安」「気分の落ち込み」といった精神的な症状を経験します。また、入院や治療の影響で「せん妄」になる患者さんも多く、高齢化を背景に、「認知症」を合併するケースも増加しています。がん治療を進めるうえで欠かせない心のケアと、治療中のせん妄・認知症対策について、東病院・精神腫瘍科長の小川朝生医師に聞きました。

不眠、不安、抑うつ症状を 薬物療法やカウンセリングで改善

精神腫瘍科は、がんの患者さんやご家族、ご遺族、さらには医療スタッフのメンタルサポートを精神医学の立場から行っている診療科です。もともとは、1960年代の米国で、乳房全摘手術を受けた乳がんの患者さんの心のケアを目的に始まりました。日本でもがん診療連携拠点病院を中心に、あらゆるがん種の患者さんにご家族を、がんの検診時や診断結果の告知、治療中、再発時、終末期までサポートし、ご遺族の心のケアも行っています。

東病院では、精神腫瘍科医と専門看護師（支持療法チーム専従）、心理療法士（心理士）が連携して、患者さんご家族、ご遺族の心のケアをしています。治療方針が大きく変わるときや、積極的な治療を止めるときなどに、精神的なサポートをすることもあります。

患者さんの悩みで最も多いのは、「寝つきが悪い」「何度も起きる」「早朝に目が覚めてしまう」といった不眠の問題です。また、「不安や緊張が強い」「何もする気になれず、だるくて動けない」「気分がふさいで食事がとれない」という人も多く、身体的な症状の陰に精神症状が隠れている患者さんも少なくありません。

抗がん剤治療で嘔吐の副作用を経験したことのある患者さんの中には、「予期性の悪心・嘔吐」といって、点滴を見るだ

けで吐き気が生じたり嘔吐したりしてしまう人もいます。予期性の悪心・嘔吐も、精神腫瘍科で対応します。一方、「家族とうまく話し合えない」「悩みがあるけれどもやもやして形にならない」という患者さんもいます。そのようなケースでは、一緒に問題を整理し、解決のお手伝いをすることもあります。

精神腫瘍科での治療は「薬物療法」「カウンセリング」「体の緊張を和らげるリラクゼーション」などが中心です。退院後の治療に備えて家庭や職場などの環境調整や、生活指導なども行い、安心して治療を続けられるようにサポートしています。さらに、当院では、がんの治療のために禁煙を勧められてもタバコが止められない患者さんのための「禁煙外来」も、精神腫瘍科が担当しています。

入院、手術など体への負担が高まる 「せん妄」のリスク

入院、手術、造血幹細胞移植、脱水、感染、貧血などによって、体に大きな負担がかかったときには、脳の機能に乱れが生じて「せん妄^{もう}」になることがあります。せん妄の主な症状は、「意識がもうろうとして話のつじつまが合わない」「見えないものを見えると言ったり、ありえないことを言ったりする」「どこにいるかわからなくなり、考えがまとまらない」（右表参照）などです。治療中であることを忘れて



東病院・精神腫瘍科長
小川朝生 医師

おがわ・あさお / 1999年大阪大学医学部卒業、2004年同大大学院医学系研究科修了。国立病院機構大阪医療センター神経科を経て、2013年に国立がん研究センター臨床開発センター（現：先端医療開発センター）精神腫瘍学開発分野長、15年より現職。精神腫瘍科医としての診療の傍ら、せん妄、認知症、高齢者のがん治療に関する研究を行っている。

点滴などのチューブを抜いてしまったり、怒りっぽくなる患者さんもいます。

せん妄は、あくまで“一時的”に出現する意識障害や認知機能の低下であり、徐々に症状が進む認知症とは異なります。入院している患者さんの20～30%にせん妄がみられ、病状が進行した人や看取りの時期には発症率が上昇します。入院中だけでなく、自宅で発熱したときや脱水に陥ったとき、薬が合わないときなどにも起こることがあるので外来でも注意が必要です。

どんな年代の人にもせん妄を生じるリスクがありますが、特に注意をしたいのは、高齢者や飲酒量が多い人、認知症の人、普段から物忘れが多い人、視力の低

下している人、難聴の人、以前せん妄になったことがある人などです。

せん妄が生じたら、できるだけ早くその原因を見つけ、体の負担になっている問題を取り除く治療を開始します。せん妄には、点滴を抜いてしまったり、興奮したり叫んだりする「過活動型」と、症状が目立たずとうとうと寝ているように見える「低活動型」の2つのタイプがあります。

低活動型の場合は、単に「元気が出なくて寝ているだけ」と思われてしまい、せん妄の発見が遅れることが少なくありません。自分自身「いつもと違って考えがうまくまとまらない」と感じたり、ご家族が「入院前と様子が違う」など「せん妄かもしれない」と思ったら、遠慮なく、担当医や看護師などに伝えてください。

せん妄が起こったときには、身体の機能を回復させる必要があり、がんの治療を一時的に調整しなければならないこともあります。また、せん妄を長期間放置すると、認知症に移行するリスクが高まるということがわかっています。そのため、がんの治療中は、せん妄の予防が重要になります。

「脱水対策」「運動」「痛みのコントロール」でせん妄予防を

せん妄を防ぐために最も大切なのは、脱水の予防です。抗がん剤治療中に吐き気などの副作用があると、お茶や水を飲まなくなってしまう患者さんがいますが、

喉が渇かなくても、意識して水分を補給するようにしましょう。季節を問わず、味噌汁やスープなども合わせて、1日1.5Lは水分をとることが目安になります。500mLのペットボトルなら、3本分です。

痛みがあったら我慢せずに医療者に伝え、痛みをしっかりと取り除くことも大切です。痛みのために眠れなくなると体への負荷が増え、せん妄になりやすくなります。もともと睡眠導入薬などを使っている患者さんに対しては、その薬の種類を確認し、せん妄が起こりにくい薬に切り替えることもあります。また、せん妄を防ぐためには、体を動かすことも重要です。昼夜が逆転して体内時計が乱れると、せん妄が起こりやすくなるので、入院中も昼間はできるだけベッドから離れて院内を歩くことをお勧めします。

認知機能が低下している患者さんの治療選択を支援

人口の高齢化によって認知症をもつ人も増えています。東病院では、これから治療を開始する予定の患者さんの5人に1人くらいの割合で、治療を進める上で何らかのサポートを必要とする方がおられます。がんの治療と並行して、精神腫瘍科で認知症の治療やケアを受けている患者さんもいます。

認知症と診断されたとしても、がんの治療が受けられないわけではありません。

ご本人が最適な治療を選択できるようにサポートし、安全に治療を続けられるような体制作りをしています。ご自身で意思決定できないくらいに認知機能の低下が進んでいて、ご家族もいないような判断が難しいケースであっても、「手術をしたほうが症状の軽減につながる」ような場合もあり、診療倫理のコンサルテーションチームとも連携を取りながら、治療方針を決める支援を行います。

中には、がんの脳転移に伴って認知機能障害が生じる患者さんもいます。病気の進行や治療に伴う認知機能障害の治療や療養環境の整備も、担当医や当院のサポーターケアセンターなどと連携しながら行っています。

さらに、新しい治療法や患者さんの支援ツールの開発も、当センターの使命です。当科は、先端医療開発センター精神腫瘍学開発分野と一体となって、がん診療連携拠点病院で実施可能なせん妄予防プログラムを開発し、全国規模で多職種スタッフ向けの研修会を開いています。認知症に関しては、認知症の人が安心してがん治療が受けられるような「支援用のプログラムの教材作り」を進めているところです。

治療を続けるうえで、つらい気持ちや痛みは我慢せず、抱え込まないことが大切です。不安や精神的な負担、痛みはできるだけ限り取り除き、がんの治療にエネルギーを注いでほしいと思います。

☑「せん妄の主な症状」チェックリスト

- 意識がくもってぼんやりとしている
- もうろうとして話のつじつまが合わない
- 朝と夜をまちがえる、病院と家をまちがえる、家族のことがわからない
- 治療していることを忘れて、点滴などのチューブ類を抜いてしまう
- おこりっぽくなり、興奮する
- 見えないものを見えると言ったり(幻視)、ありえないことを言う(妄想)
- 夜、ねむらない
- 症状は急に生じることが多く、夜になると症状が激しくなる

せん妄は、一時的に表れる体の症状の一つ。早期に発見して適切な治療を行えば半数以上の患者さんに改善がみられるといわれている。



精神腫瘍科が東病院看護部と共同で作成し、診療の際に用いている記入式の「ライフワークシート」。退院後の治療の進め方や療養生活の送り方について、患者さんがご家族や医療者と一緒に確認していくためのツールとして活用されている。

東病院 精神腫瘍科 HP
<https://www.ncc.go.jp/jp/nccce/clinic/psychiatry/index.html>





あなたを支えるチーム医療の輪 vol.7

ウオック WOC外来で「ストーマケア」と「排便機能障害の改善」を

直腸がんや婦人科がんなどの手術の後には人工肛門(ストーマ)の造設が必要になったり、たとえ肛門が残せても、排便機能障害に悩まされたりすることがあります。東病院では平日は毎日、看護部の皮膚排泄ケア認定看護師が「WOC (Wound, Ostomy Continence) 外来」を実施し、ストーマケアや皮膚・排泄ケアを行っています。WOC外来を担当する皮膚排泄ケア認定看護師の角諒子さんが、排便に関わるQOL (生活の質)を改善するケアについて解説します。

ストーマ造設の不安を軽減

東病院の入院準備センターでは、直腸がんや婦人科がんの手術後、一時的あるいは永久にストーマが必要になる患者さんに対し、看護師がストーマの模型を用いながら術後のセルフケア方法などを丁寧に説明しています。ストーマとは、手術によって腹部に自らの腸管を用いて造設する排泄口で、そこに排泄物を受け止めるストーマ袋を装着します。

手術前には、どの位置にストーマを造設するかを決める「ストーマサイトマッキング」を行います。これは、WOC外来の皮膚・排泄ケア認定看護師もしくは研修を修了した看護師が担当しています。

WOC外来と医師が連携して術後QOLアップを目指します



東病院大腸外科
西澤 祐吏医師

当院は、直腸がんの肛門温存に力を入れており、がんの根治性を落とさずに肛門を温存する「括約筋間直腸切除術(ISR)」の症例数は、国内トップクラスです。程度の差はありますが、ISR後はほぼ全員の患者さんの排便機能が低下します。人工肛門を作ったほうがQOLが高まるケースもあるため、大腸外科の医師とWOC外来の看護師らが連携して、患者さんの生活や価値観に合わせた手術法が選択できるようにサポートしたいと思っています。今後はさらに、排便機能障害を改善する治療やケアにも力を入れ、患者さんの満足度を高めたいと考えています。

WOC外来は、ストーマ、排尿・排便機能障害、痔瘡しよくそうなどのケアや相談を行う看護外来です。

ストーマを造設する位置は、患者さんの体型、生活スタイル、仕事の内容(立ち仕事かデスクワークか)などを考慮して決めます。患者さんがストーマ袋を装着しやすく、装着時にしわやくぼみが生じない場所を選んで、位置を決めています。

ストーマ造設後も日常生活の制限はほとんどなく、仕事や運動などはなるべく手術前の生活に戻れるよう支援を行っています。ストーマをつけたまま浴槽や温泉、プールなどに入ることも可能です。入院中に、ストーマ周囲のスキンケア方法、ストーマ袋の交換の仕方などを覚えていただき、便の漏れなどの不安・心配がなく退院できるように支援しています。

装具は3～4日に1回交換します。皮膚のトラブルを減らし快適にストーマを使い続けるために重要なのが、スキンケアです。交換の際は、皮膚を刺激しないように静かにストーマ袋をはがします。その後はせっけんを泡立ててストーマ周囲の皮膚を丁寧に洗浄し、シャワーなどでやさしく洗い流します。水分を拭き取り、皮膚を乾かした後は、必要に応じて肌の保湿ケアも行います。

退院後は、担当医の外来受診と合わせて、定期的にWOC外来を受診していただき、ストーマの不具合や合併症がないかを確認します。ストーマ周囲の皮膚の腫れや、便漏れなど、困ったことがあったらWOC外来をご活用ください。



「正しいセルフケア法を身につけて、安心して外出できるよう私たちがサポートします」
(角諒子看護師)

排便障害を防ぐ個別ケアも

肛門を温存した患者さんの場合は、頻便や便失禁などの排便機能障害が生じることがあります。肛門周囲の皮膚や粘膜のトラブルを防ぐためには、拭き過ぎ・洗い過ぎは禁物です。失禁が心配でティッシュペーパーなどを下着に当てておく患者さんもいますが、逆に悪化させてしまうこともあるので注意しましょう。

食生活を改善したり、骨盤底筋訓練やバイオフィードバック療法*などのリハビリ法を行ったりすることで、排便機能障害が改善するケースも多いので、一人で悩まず看護師や医師に相談してください。患者さん一人ひとりのQOL(生活の質)の改善に役立つよう、精神面も含めてサポートしていきたいです。

*バイオフィードバック療法とは、肛門の圧を測定しながら肛門を締める練習をするトレーニング法。

「がんと生きる」を
支えます!

中央病院・患者サポートセンターへようこそ vol.8

がんや治療に伴うむくみの「リンパ浮腫ケア外来」

中央病院・患者サポートセンターでは、週4回、リンパ浮腫ケア外来で、手足などにむくみのある患者さんのケアを行っています。どのような外来なのか、がん看護専門看護師、乳がん看護認定看護師の垣本看子さんが紹介します。

むくみのセルフケアをサポート

—リンパ浮腫ケア外来とは？

がんやその治療によってリンパ液の流れが障害され、腕や脚などにむくみが生じている患者さんに対して、セルフケアを行えるようサポートする外来です。医療リンパドレナージ(手で行う医療的マッサージ)の上級セラピスト資格を持つ看護師が、医師の指導の下、火曜日以外の平日、週4回外来を開いています。必要に応じてリンパドレナージをする場合がありますが、施術が目的の外来ではないことをご理解ください。

—対象はどのような患者さんですか。

最も多いのは、乳がん、婦人科がん、前立腺がんでリンパ節を切除したために、いわゆる続発性のリンパ浮腫と呼ばれる手足のむくみが出ている患者さんです。骨軟部腫瘍、皮膚がんで手術後にむくみが出た患者さんや、がんの進行によって手足や全身にむくみが出ている方のケアも行っています。

生活上の注意と圧迫療法も重要

—利用には予約が必要ですか。

はい。リンパ浮腫ケア外来の利用は予

約制です。手足や全身にむくみを見つけた方は、まず、担当医に相談してください。むくみが出る原因はさまざま、続発性のリンパ浮腫とは限らないからです。担当医が、リンパ浮腫ケア外来の対象になる患者さんかどうか判断したうえで、予約を取っていただいています。

—どのようなケアをしているのですか。

体重管理や感染予防など日常生活の注意点、スキンケア、リンパドレナージ、圧迫療法、リンパエクササイズの方法などを指導します。患者さんご自身がセルフケアを行うことで、症状を軽くすることや悪化を防ぐことができます。

圧迫療法は、弾性着衣や包帯を用いて腕や脚を圧迫し、リンパ液の再貯留を防ぐ方法です。弾性着衣は圧力や形状、素材もさまざまあるので、選び方や購入のサポートもしています。

生活スタイルや職業、体の状態によって、注意点やできる工夫は異なるので、一人ひとりの患者さんに合わせて、きめ細かいケアを心がけています。

月3回のケア教室で集団指導も

—リンパ浮腫ケア教室も開催されていると聞きました。どのような教室ですか。

乳がん、婦人科がん、前立腺がん、皮膚がん、骨軟部肉腫などの手術後で、リ



がん看護専門看護師、乳がん看護認定看護師の垣本看子さん

ンパ浮腫が起こるリスクのある方、すでにむくみが生じている患者さんやご家族を対象にした教室です。リンパ浮腫について知っていただき、予防や改善のための日常生活の注意や工夫について紹介しています。

上肢のケアの教室は月2回、下肢は月1回開催しています。予約が必要ですので、参加希望の方は、2階A外来の受付で声をかけてください。

—患者さんへメッセージをお願いします。

がんの進行によるむくみの軽減方法も患者さんと一緒に考え、不安やつらい症状を軽減したいと思います。むくみでつらい思いをしている方は、担当医を通してリンパ浮腫ケア外来をご活用ください。



圧迫療法に用いる弾性着衣のサンプル。患者さんの生活や状態に適したものが選べるようサポートしている

「患者サポートセンター」をご活用ください

中央病院8階にあり、さまざまな職種 of 専門家が患者さんとご家族の相談に応じる他、各種の患者教室も開催しています。

■利用時間 月～金曜日 8時30分～17時15分

■一部のプログラムは要予約



当センターへのご支援、厚く御礼申し上げます。今後ともますますのご支援を賜りますようお願い申し上げます。お預かりした寄付金は、プロジェクト寄付、または、がん研究・がん医療の発展のため、大切に使用させていただきます。

116,746,727円 526件
(2019年度累計 2019年11月30日現在)

寄付者ご芳名 (敬称略/掲載ご希望者のみ)

■がん研究・がん医療のための寄付(使途を指定しない寄付)
 有限会社司馬解体 瀬瀬晴之 株式会社DropStone
 株式会社カラーエンタープライズ 清水淳一 池田一郎
 有限会社ガッツ 代表取締役 山本博 猪森信二 橋谷祐司
 鈴木則子 金城正和 栗原義典 赤池正二 Aida Al Rowas
 田中健夫 乾露予 松長広子 田中一光 齊藤恵美子
 山田拓 平山美佐子 玉井正信 磯貝桓 師子角晋也
 内田博之 秋山保恵 鈴木弘崇 阿部勇次・テル子
 鎌野龍 矢島正和 中村浩子・KING悦子 和田信幸
 小山隆洋・潮 永利久志 増子伸太郎 真島誠一 奥幸代
 加藤キヨ子 天間建設株式会社 代表取締役 天間勝治
 前田利昭 渡邊優希 金本佐紀子 藤井護 山口聡子

加藤定男 長谷川俊志

■プロジェクト寄付(使途指定寄付)

□NEXT 佐藤健三 水野寛 松本豊くんを送る会
 中軍二 赤塚孝子 今福富子 前田知 橋本佳之
 浦田毅之 三池嘉江 蔵田友義 鈴木美佐子
 □患者サポートセンター 梶和子 西村昭男・早苗・育子
 □SCRUM-Japan CHARITESjewelry株式会社 住友伸子
 □Endeavor 福川大和
 □届けるを贈る 届けるを支える『がん情報ギフト』
 日向良和 緩和ケア推進コンソーシアム
 株式会社北信臨床 神奈川ロータリークラブ

■物品のご寄付
 中尾博子 高橋晴美

(2019年9月1日~11月30日)

■ご寄付について WEBサイトはこちら

がん研究センター 寄付 検索



■詳しくは寄付担当まで

中央病院 03-3547-5201(内線2359・2240)
 E-mail: ncckifu@ncc.go.jp
 東病院 04-7133-1111(内線91460・2343)
 E-mail: kifu@east.ncc.go.jp

女性の治療&生活を支援 東病院・レディースセンターから

がん治療後の「くすりによる妊娠・出産への影響」について

東病院薬剤部 副薬剤部長・米村雅人

●妊娠・出産への影響を知っておきましょう

1950年代後半に睡眠薬として開発されたサリドマイドというくすりをご存じですか？ 妊娠中の女性が使用したところ、生まれた赤ちゃんの催奇形性が報告され、国内外で販売中止となつたくすりです。しかし、その後の研究により、1998年には米国でハンセン病に伴う結節性紅斑(下肢にあらわれる皮下結節)に対し承認されました。日本では2008年に再発または難治性の多発性骨髄腫(血液細胞のがん)に対する承認を受けており、厳格な避妊指導と管理システムのもとで使用されてきました。また、様々な疾患に用いられているシクロホスファミドという抗がん薬は、卵巣・造精機能の低下を起こし、妊孕性を低下させることが知られています。

このように抗がん薬として用いられるくすりの中には、治療に必要な効果とは別に、妊娠や出産に影響を及ぼす可能性が示唆されているものがあります。

くすりが実際に使用できるようになるまでには、「効果と安全性の確認」が行われているのですが、妊娠や出産への影響については、「ヒトを対象にした調査」ができません。そのため、動物等を用いた「非臨床試験」と呼ばれる調査を行って影響を推察し、「有益性が危険性を上回る」場合にのみ、がん治療に用いられるくすりとして承認されます。

●心配があれば薬剤師に相談を

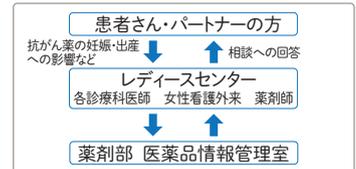
将来、子供を持つことを希望されている患者さんとそのパートナーの方は、抗がん薬の妊娠や出産への影響について、心配されるかと思います。これから始まる治療に対して大きな不安がある中で、治療後の生活や将来を見据えたご相談は難しいかもしれませんが、気になることは、薬剤師など医療スタッフにお声掛けください。

また、女性患者さんの治療や生活をサポートするた

め2018年に東病院に開設された「レディースセンター」を、是非ご活用ください。私たち薬剤師も、当センターのスタッフに加わっています。患者さんやご家族からのご相談に、最大限お力になりたいと考えています。



くすり妊娠についての相談はレディースセンターへ



※下記サイトも参考になります。

●「日本がん・生殖医療学会」HP
<http://www.j-sfp.org/index.html>

東病院 レディースセンター HP
<https://www.ncc.go.jp/jp/nccce/division/ladyscenter/index.html>



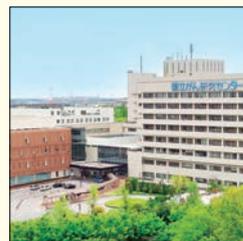
<https://www.ncc.go.jp>

<https://www.facebook.com/nccgojp/>



中央病院 (築地キャンパス)

〒104-0045
 東京都中央区築地5-1-1
 Tel:03-3542-2511(代)



東病院 (柏キャンパス)

〒277-8577
 千葉県柏市柏の葉6-5-1
 Tel:04-7133-1111(代)



国立がん研究センター広報誌「日々歩」に関するご意見・ご感想は「広報企画室 日々歩」係までメールまたはFax、手紙にてお寄せください。

✉ ncc-admin@ncc.go.jp

FAX 03-3542-2545

〒104-0045 東京都中央区築地5-1-1 国立がん研究センター「広報企画室 日々歩」係

[企画制作]国立がん研究センター企画戦略局広報企画室 [編集協力]株式会社 毎日企画サービス

発行:2020年1月